

鷹の目の狩人

XIV

井蛙の積み重ね自覚が 新世界へ

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原 道晴

井蛙(せいあ)とは中国の故事でいわゆる、井の中の蛙、後漢(西暦25年～)の出来事である。故事を紐解くと日常座右の銘としている多くの言葉がめぐらされ、さすが、中国数千年とうならざるを得ない。多くはなるほどと思う語源であり、教訓である。

新入社員の頃、製版を経験して、印刷原稿である写真部門に配属された。後工程を理解しての新世界は楽しいものであり、数年で習得したが、新しい管理職が就任された。異部門からの着任に、どうなるのかと見守っていたら、数カ月で簡単に乗り越えられた。プレイヤーと管理能力は違うと実感したが、そのことは後日まで思い知らされた。素晴らしい成績を上げる営業マンが必ずしも部下を育てる優秀な管理者ではないことも事実であるが、その方は後に専務まで担当され、なるほどと理解した。新規開拓で機材を担当し、写真で一番と考え、俺がいなければと舞い上がっていたら、簡単に転勤辞令をいただき、自分の代わりなどどこにでもいる、企業はすごいなあと実感した日々であった。大阪時代に、東京の市場調査の許可を得て、なんと、10倍の物量で物が動く東京が魔界都市のように思われた。後に東京の魅力に圧倒され、いまだに東京抜きで物を考えられない。一極集中は弊害なのか、利点なのか、地方が不甲斐無いのか、東京の代わりは見つからない。

写真の後にはインキ部門の営業所勤務であった。製版、写真、インキと順番に経験させていただいた。ただ、生まれてこの方、大阪を離れたことがなかった。新世界は豪雪地帯であり、一晩で1mも2mも降り、出張すると山道ではトラックの轍しかなく、乗

用車で乗り入れると車が亀のようになって前に進まない。1階が雪で埋まっていて2階から出入りしている。車の上に積もった2mの雪を下すと車の屋根が起き

上がる等々新鮮な経験を積むことできた。毎日数時間雪かきをしないと仕事ができない。その間にも駐車場が雪で埋まる。雪国の方の忍耐強さに敬服

した。1年ほどは大阪の友人に大変だと連絡していたが、絶対に経験しないと理解できないと確信した。本社の情報量を各地に展開することで顧客に歓迎していただき、情報が力であることを実感したのも地方経験であり、後に精力的に全国飛び回る原点となった。工夫改善することも限りなくあった。異業種からの技術導入は他部門を経験せず、そこだけにいたのでは分からない。面白いことをやり放題であった。ただ、マーケットのボリュームはいかんともしがたく、数年でやるのがなくなった。大阪転勤希望を出したら、東京転勤の辞令をいただいた。だが、東京転勤がなければ、今の自分も存在しない。

東京では包装事業の開発を担当した。会社としても、インキ以外は新世界の分野であった。顧客の立場でものを考え、ひたすら、同化することを考えた。省人化、無人化、未来の工場を夢見て、世界中を駆け巡り、異業種を観察し、業界の外から業界を観察した。新技術の多くに挑戦した。工場内物流に挑戦し、ビジネスパートナーに恵まれて、ひたすら、オンリーワン、ナンバーワンを目指した。個々には、産業界全体から自分を、企業を、業界を見る目を養った。東京視点が日本視点であり、世界視点であることを実感し、実践し、その技術と情報をすべての顧客に提供しようとひたすら全国を飛び回った。数百の工場の現場を俯瞰し、蟻のように観察し、顧客の将来像を提案した。グラビアの環境対策に携わったのは新世界最後の仕事であった、業界と同化することに努めた。

新世界、いつの時代も井の中の蛙であった自分の反省に原点があった。



眠りの冷めた争乱、緻密な設計品川台場



品川大筒御台場出来之図、眠りから覚めていますか